平成22年11月5日

平成22年「まほろば会秋の見学旅行」資料

平成22年11月5日【金】～11月7日【日】

― 播磨・淡路 ―

まほろば会

はじめに

今回の見学旅行では、播磨・淡路地方を回ります。特に淡路地方は、当会としては未踏の地です。

山陽新幹線「相生」駅に集合、まず第一の見学地は「赤穂四十七士の仇討ち」であまりにも有名な、播州「赤穂城跡」です。「赤穂城跡」は「国史跡」に指定されています。「国史跡」は、日本全国に約４６万か所ある「遺跡」の中でも、日本の歴史と文化を明らかにするため重要だと学術的に認定され、文化財保護法にもとづいて国から指定され、未来永劫に保存されます。現在では、およそ１，６５０か所あります。

今回の見学旅行の見どころは、播磨地方における「弥生時代から古墳時代にかけての墳丘墓」です。県史跡に指定されている「有年原・田中遺跡」は、弥生時代後期の有年王の墓といわれています。たつの市では、弥生時代初期から古墳時代にかけての墳丘墓・古墳がならぶ「養久山古墳群」、姫路市で国史跡の「丁・瓢塚古墳」、神戸市の「五色塚古墳」そして「県立考古博物館【大中遺跡】」も見学します。途中、聖徳太子ゆかりの「斑鳩寺」にも足を伸ばします。

さて、今回の見学旅行のもう一つの目玉は、当会では初めての訪問となる淡路地方です。まだ記憶に新しい「阪神・淡路大震災」の爪あとをそのまま残す「野島断層保存館【国指定天然記念物】」を見学します。また、弥生時代の鍛冶工房として近年脚光を浴びている「五斗長垣内遺跡」、淡路の国の一の宮「伊弉諾神宮」（国生み神話）そして最後のお楽しみは「鳴門のうずしお」見学です。

それでは、２泊３日の「まほろば会秋の見学旅行」を、一緒に楽しみましょう。

幹事一同

［事前学習参考資料］

●今回の見学旅行の主たるテーマである「前方後円墳」について、ちょっと予習（復習ですね。）してみましょう。

＜前方後円墳の時代とは＞

・前期：三世紀中ごろから四世紀後半ごろまで
・中期：四世紀末ごろから五世紀後半ごろまで
・後期：五世紀末ごろから七世紀初めごろまで
・（前方後円墳消滅後の）古墳時代終末期：七世紀前半ごろから八世紀初めごろまで

＊三世紀中ごろから七世紀初めごろにかけての３５０年間に、北海道・北東北と沖縄を除いた日本列島で約５，２００基、同じような構造をもった墳墓様式、前方後円（方）墳が築造されました。墳長１００メートル以上の大型前方後円（方）墳は、３０２基しかありませんが、そのうちの１４０基はいわゆる畿内地域に集中しています。もちろんそれらには、膨大な労働力と富が注ぎ込まれていたのです。

今回見学する神戸市垂水区にある「五色塚古墳」も、墳丘の長さ１９４メートル、前方部の幅８１メートルと立派な前方後円墳です。四世紀後半ごろの古墳時代前期後半に築造されたものです。周濠をめぐらせた巨大な墳丘は三段になっていますが、一段目と二段目は低くて、三段目だけがいっそう高くつくられています。そこには死んだ首長が埋葬されていたのでしょう。特別高く築成することで亡き首長の存在を、広くアピールしたのでしょう。五色塚古墳のある場所は今でも交通の要所ですが、ことに古墳時代では、瀬戸内海から大阪湾にいたる海上交通の要所だったはずです。大和政権の拠点に向かう船の漕ぎ手や、乗船していた人々はこの巨大な墳丘を、畏怖の念を込めて見上げていたことでしょう。

⇒次ページ以降に、インターネットから引いた「前方後円墳」の解説を掲載しましたのでご参照ください。

前方後円墳

出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

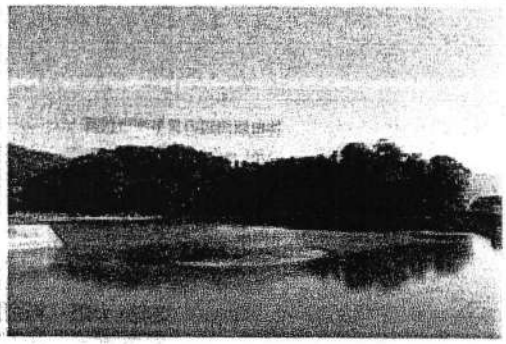
前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）は、日本における古墳の一形式で3世紀から7世紀頃にかけて盛んに造成された。平面が円形と方形の墳丘を組み合わせた形状は、日本独特の特徴であり、出現期より規模の巨大さを特徴としている。墳形については、現在では円形墳丘墓の通路部分が発達し墳丘と一体化したものであると考えられている。前方後円墳は日本列島の広範囲に分布しており、北は岩手県から南は鹿児島県にまでおよんでいる。また、近年、朝鮮半島西南部でも若干の存在が確認されている。

「前方後円」とは「前部が方形（四角形）、後部が円形」という形を意味している。

仁徳天皇陵と比定されていた大仙陵古墳
大阪府堺市

目次

- 1 概要
  - 1.1 起源
  - 1.2 形状
  - 1.3 分布
  - 1.4 終焉
- 2 形状と構造
  - 2.1 後円部
  - 2.2 前方部
  - 2.3 造出
  - 2.4 祭祀用土器
  - 2.5 横穴式石室
- 3 朝鮮半島南部の前方後円墳
- 4 脚注
- 5 参考文献
- 6 関連項目



3世紀築造と推定される箸墓古墳（墳丘長278メートル）

概要

起源

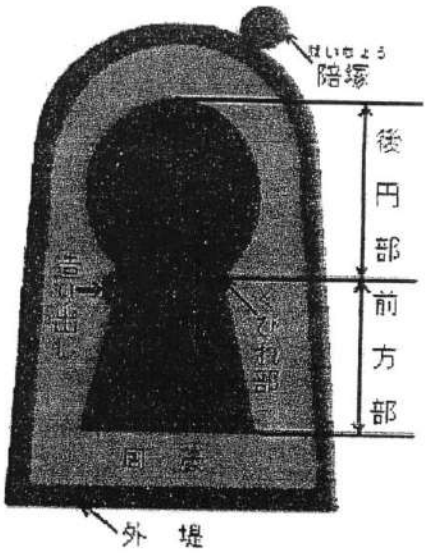
日本が起源である前方後円墳についてこれまで幾つかの議論がおこなわれている。最もよく知られているものは、弥生時代の墳墓から独自に発展したものであるという学説である。この説においては従来より存在した円形墳丘墓の周濠を掘り残した陸橋部分（通路部分）が発達し、墓（死の世界）と人間界を繋ぐ陸橋として墳丘と一体化したと考えられる。それに対して梅原末治らは中国大陸からの影響があったとの説を提起していた。梅原は始皇帝陵などの前方に設けられていた祭壇などに由来するとしている。

形状

前方後円墳の形状は、古くはヒョウタン形などとも形容されていた。「**前方後円**」の語は、江戸時代の国学者蒲生君平が19世紀初めに著した『山陵志』で初めで使われた。蒲生は、各地に残る「車塚」という名から、前方後円墳は宮車を模倣したものだと考え、方形部分が車の前だとした。しかし現在では古墳時代にそのような車は存在しなかったと考えられている。明治時代末

期になり、ウィリアム・ゴーランドは円墳と方墳が結合して、清野謙次は主墳と陪塚が結合して前方後円墳になったと推測した。その後、壺形土器の形や盾の形を模倣したというような学説も生まれた。

現在の研究では、平面では円形をしている後円部が埋葬のための墳丘で主丘であり、平面が撥形・長方形・方形・台形などの突出部をひっくるめて前方部と呼ぶ。前方部は、弥生墳丘墓の突出部が変化したもので、もともと死者を祀る祭壇として発生・発達とする説や葬列が後円部に至る墓道であったとする説があり、次第に独特の形態を成したと考えられている。ただし時代が下ると前方部にも埋葬がなされるようになった。しかし、慣習と便宜によって前方後円墳、前方部、後円部といった用語はそのまま使われている。古い形の前方後円墳は前方部は低く撥形をしており、後円部は新古にかかわらず大きく高く造られている。撥形にしているのは、葬列が傾斜の緩やかな道を通れるように前方部の左右の稜線のどちらかを伸ばしたものと考えられている。



模式図

分布

前方後円墳の存在が明確でないのは、北方では北海道・青森県・秋田県、南方では沖縄県の計4道県にすぎない。建造時期や個数には幅があるものの、他の43の都府県では数百基から1、2基の前方後円墳が知られている。離島の対馬、壱岐、隠岐などにも存在する一方で、これまでのところ淡路では存在が確認されていない。各地域で最後に建造された前方後円墳はその時期にほとんど差がないことが判明している。5世紀を最後に建造が途絶えた徳島県などは数少ない例外である。

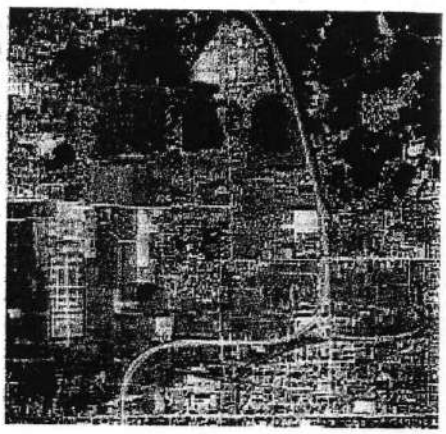
日本列島以外では、韓国の西南部、全羅南道に当たる栄山江流域を中心に10基程度が分布し[1]、韓国内ではそれ以外にはみられない[1]。

近畿地方を中心として日本全国に広く分布する大型の前方後円墳の周りには、小型の前方後円墳、あるいは円墳・方墳が寄り添うように建造されており、複数の大型古墳から構成される古墳群が形成されている箇所も多い。古墳時代に築かれた巨大な墳墓中はその多くがこの前方後円墳であり、その中で最も大きなものは大仙陵古墳(伝仁徳天皇陵)であり、墳墓の表面積としてはクフ王のピラミッドおよび始皇帝陵をしのぐ世界最大の墳墓である。墳丘の全長が486メートル、高さが36メートル、周りには、三重の周濠を巡らしている。

終焉

6世紀になると前方後円墳の造られ方に変化が生じてくる。関東地方以西ではほとんどの前方後円墳の規模が縮小し、墳丘長100メートル以上の規模の比較的大きなものは九州の岩戸山古墳、尾張の断夫山古墳など一部を除くと、奈良盆地内や古市古墳群など、畿内に集中するようになる。

また岩戸山古墳と断夫山古墳、そして畿内でも大王墓の可能性が高い古墳とその他の古墳との規模の格差が拡大している。これは当時の社会体制の変化を表しているものと考えられ、特に河内大塚山古墳、見瀬丸山古墳、今城塚古墳といった大王墓と見られる古墳の規模は他を圧しており、これまでの有力首長の共同統治から大王への権力の集中が始まったものと見られている。見瀬丸山古墳など6世紀の大王墓と推定される墳墓は、3世紀から大王墓が造られ続けてきた古市古墳群、百舌鳥古墳群、馬見古墳群、佐紀盾列古墳群、大和・柳本古墳群といった古墳群から離れた場所に造られており、この点からも6世紀の大王の権力構造に変化が生じたことがわかる。


佐紀盾列古墳群
奈良県奈良市

また前方後円墳の形式にも変化が生じ、陪塚が見られなくなり、葺石の使用も少なくなり、墳丘の段築も3段が基本であったものが2段に減少する。そして関東地方を除くと埴輪も使用されないようになっていく。つまり6世紀の前方後円墳は大きさばかりではなく視覚的な見栄えも低下しており、当時の社会における前方後円墳そのものの位置づけにも変化が起きてきたと考えられる[2]。

一方、関東地方では他の地方とは異なり、6世紀、埼玉古墳群など墳丘長100メートルクラスを含む前方後円墳が盛んに造られる。埼玉古墳群では長方形をした二重周濠の築造、下野の前方後円墳では基壇と呼ばれる広い平坦面を持った前方後円墳など、地域色が見られる前方後円墳が造られており、6世紀の段階ではまだ全国一律の造墓規制を行う段階には至っていない。

前方後円墳の出現期から、大王陵と見られる大型の古墳を始めとする多くの前方後円墳が集中的に造られてきた畿内の古墳群では、6世紀半ばに古市古墳群で前方後円墳の築造が終了した後、前方後円墳は造られないようになり、6世紀後半になると、全国各地で前方後円墳が造られないようになっていく。大王陵としても6世紀後半に造営されたとみられる見瀬丸山古墳か梅山古墳、または太子西山古墳を最後に前方後円墳から方墳へと変わった。関東地方や周防など[3]、一部の地域で7世紀初め～前半まで前方後円墳の築造が続いたケースもあるが、おおむね6世紀末までに前方後円墳の築造は終了し、その後、首長墓は主に円墳ないし方墳に移行し、大王墓など一部の首長墓は八角墳などの多角形墳に移行する。

形状と構造

前方後円墳は、墳丘（前方部・後方部・造出）、埋葬施設（棺室・槨室・石室）、副葬品、外表施設（封土固めの葺石、祭祀用の土器・埴輪など）などの諸要素から成っている。

後円部

後円部は、前方後円墳で最も大切な場所である。それは、そこに亡き首長を埋葬し、盛大に埋葬祭祀が行われてきたからである。その頂上は狭いが平坦に造られていて、その下の土中に埋葬を行うのに都合のよい形に造られている。裾部から頂までは高く造られ、その斜面の勾配は、平均的には25～26度あり、それ以上の急勾配もある。築造当時には斜面に葺き石が敷かれて、登ることができないように造られている。前方部から後円部に登るために一つの工夫が為されている。それを隆起斜道（りゅうきしゃどう）という。この隆起斜道の設置によって後円部と前方部が繋がることになる。しかし、この斜道だけで、頂上や頂下の墓壙に達することが難しい場合が多いので斜道の途中から墓壙に達するための掘割墓道（ほりわりぼどう）を設置した。また、くびれ部や前方部の斜面も急勾配に造られており、簡単に登ることができなくなっている。葬列が登れるのは前方部の前面の左右の隅角のどちらかで、そこを緩い斜面にして登りやすくしている。このように前方後円墳は簡単に登れないような急斜面で囲まれているといってもよい。登ることを慎めという意味であり、前方後円墳は禁忌の状態に築造されている。

前方部

最古の前方後円墳は3世紀代の箸墓古墳のように前方部の前面幅が撥（バチ）形になっており、前方部の前面幅が後円部の直径に匹敵するほど開いている。京都府木津川市椿井大塚山古墳などが挙げられる。高さも後円部の方が高くなっている。次の段階では、前方部が前面に向かってまっすぐ伸び、幅狭く低い。例として、桜井市茶臼山古墳などがある。

その後、時代が下るにつれて後円部の直径と前方部の幅がほぼ同じとなり（古墳時代中期）、さらに時代が下ると前方部は巨大化の一途をたどり、前方部の幅が後円部の直径の1.5倍、中には2倍に達するものもあり、高さも前方部のほうが高いものが多い（古墳時代後期）。また、古墳時代後期の一部の前方後円墳には、「剣菱形」と呼ばれる、前方部の中央がへの字のようにやや角ばって外側に突き出すような形状をしているものがある（なお剣菱形が確認されているのは今城塚古墳、河内大塚山古墳、見瀬丸山古墳、鳥屋ミサンザイ古墳、瓦塚古墳と極めて数が少ない）。

造出

最古級の前方後円墳には造出（つくりだし）は見つかっていない。墳丘長200メートルを超える大形前方後円墳のくびれ部の裾（すそ）に造り出しが見られる。佐紀盾列古墳群と奈良盆地西方の馬見古墳群の大形前方後円墳、古市古墳群・百舌鳥古墳群の大形と中形前方後円墳に設けられる。この造出に埋葬が行われている例が見られる。埴輪を立て並べたり、形象埴輪を置いたりしている。祭祀・追葬が後円部や前方部の墳頂で行われるのではなく、くびれ部裾付近に作られた造出で行われたことは、埋葬祭祀の考え方が変わって来たのではないか。それは、墳頂へ登ることが禁忌され、畏敬されたことと関わっていると考えられ、追葬や祭祀は一定期間行われると停止されるものと思われる。

祭祀用土器

詳細は「埴輪」を参照

埋葬祭祀で使用された土器は、最古級の前方後円墳では、宮山型特殊器台・特殊壺、この土器から変化した最古の埴輪といわれる都月形円筒埴輪と次に古い特殊壺形埴輪、円筒埴輪、家型埴輪、武器形埴輪、人形埴輪などである。特殊土器は、日常の器台・壺と違い大きく、文様で飾られている。器台は一メートルほどもあるものもあり、壺も40～50センチぐらいで、器台に壺を載せると人の肩ほどにもなる。このような大きな目立つ道具を使って亡くなった首長の霊魂と首長権を継承するための祭祀を行ったと考えられる。

横穴式石室

詳細は「横穴式石室」を参照

横穴式石室の石室そのものは広い空間であり、一人の死者だけでなく親族や血族の死者を一緒に葬ることができる。今までの竪穴式石室の一人の死者（首長）を葬るという葬法とは大いに違い、埋葬観念や埋葬施設に変化が生じた。埋葬祭祀は、隅角（前方部の前面の左右のどちらか）から前方部頂へ登り、そこから後円部に向かって降りていき、隆起斜道（後円部へ登りやすくした斜面）を登り、掘割墓道（石室への道）を経て墓壙に入る。石室は後円部頂に入り口を前方部方向に向けて造る。このような古式の例は、福岡県老司古墳や鋤崎古墳に見ることができる。

朝鮮半島南部の前方後円墳

1983年に韓国慶尚南道固城の松鶴洞一号墳が前方後円墳であるとして紹介されて以来、朝鮮半島南西部で前方後円墳の発見が相次いだ。その後の調査により、松鶴洞一号墳は築成時期の異なる3基の円墳が重なり合ったものであり、前方後円墳ではないことが明らかになったものの、現在までに、5世紀後半から6世紀半ば築造されたとみられる前方後円墳が、百済が南遷する前は金官伽耶を中心とする政治的領域の最西部であったとされる[4]全羅南道に11基、全羅北道に2基確認されている[5]。

現在前方後円墳が集まる榮山江（*Yeongsan-gang*）流域は、墳丘形態と円筒埴輪などの外部施設[6]、甕棺による独特な埋葬法や九州北部でも発掘されている鳥足文土器の副葬から、百済とは異なる文化を持つ地域であることが見受けられる[7]。このことから、被葬者について、大和朝廷によって当地に派遣された官吏や軍人、大和朝廷に臣従した在地豪族、あるいは倭人系百済官僚であるとする見解や、いずれも倭国と縁のある東城王・武寧王に随伴した倭人有力者とする見解などが出ている[8][9][10][11][12][13]。榮山江流域に倭人が住んでいたという説も存在する[7]。

韓国でも見解が分かれる。百済が高句麗の南下により、475年に首都の漢城（現在のソウル）を落とされ、都を熊津（現在の現在の忠清南道公州市）に移し、高句麗戦で失った地域の代わりに求めた土地が榮山江流域であったが、武寧王がこの地域を支配しようとしていた時代に前方後円墳が現れており[7]、百済が背後に他国との関係があることを見せつけるために造った、あるいは百済に協力した倭人が造ったとするものもある[7]。

古代、文化は朝鮮半島から日本へ一方的に移動したとする先入観から、前方後円墳を『里帰りによる逆輸入』などと考える研究者も存在し、そのような固定観念による全羅南道西部の前方後円墳についての解釈に日本

の研究者から批判の声も挙がっていた。近年は、前方後円墳を倭人の墳墓と認め、倭の軍事勢力が栄山江流域で活動していたという事実を認定した上で、百済に服属した倭系官僚がこの地を支配していたなどと従来の観念から脱却しつつある韓国人学者も出ている[14]。

朴天秀は、韓国の前方後円墳が在地首長の墓を避けるように単発的に存在し、石室を赤く塗るものもあり九州の古墳と共通点が多いことから、その被葬者は九州出身の豪族である可能性を提起している。また、当時の先進文化は韓国から日本に渡ったものであり前方後円墳もその一つであるという認識が80年代の韓国にはあったが、それは間違いであり、韓国の前方後円墳は5～6世紀に日本から韓国に伝わったものであると指摘している[15]。

なお2005年10月31日、韓国のマスコミでソウル江東区で百済時代の前方後円墳10数基が発見されたとの報道があった。しかし調査主体が考古学の調査専門機関ではないこと、発掘調査ではなく地質探査技法による結果に基づいていること、あまつさえダウジングを用いた粗末な調査などから、当初から報道内容に疑問の声が上がっていた。そして、翌日に行われた韓国国立文化財研究所による調査で自然岩盤が現れ、前方後円墳ではなく単なる小山である事が明らかになった。

脚注

1. ^ab 田中(2001)
2. ^ 古墳時代の政治構造。32、33頁。
3. ^ 西日本の終末期古墳。123頁。
4. ^ 吉田孝『日本の誕生』岩波書店
5. ^ 田中俊明は私見と断った上で、古墳は一箇所に固まらず、点々としており、他の古墳群と離れ、孤立した形で存在しているものが多い。また、古墳の全長は、小さいもので約30メートル、大きいもので77mだが、日本の前方後円墳に比べれば大凡、小規模である。築造プランは基準が統一されておらず、また、埋葬施設の主要な構成部分は、チャラボン古墳が竪穴式石槨で、ほかは横穴式石室と考えられている。段築・造り出しや葺石といった日本の前方後円墳に見られるものは韓国の前方後円墳に見られない。周濠については、あるものとないもの、両方存在している。遺物については、百済系遺物と共に円筒埴輪や南島産貝製品、内部をベンガラで塗った石室といった倭系ともいえる遺物も発見されているなどと指摘している(→田中、2001)。また、倭系の遺物に属す巴型銅器や碧玉製の石製品などは、日本の場合なら首長の墳墓や前方後円墳などから副葬品として出る支配階級の権威の象徴だが伽耶では、地位の低い人間の墓からも出てきている(→文藝春秋、1994)
6. ^ 現地で製作されたと考えられる円筒埴輪、ベンガラ(酸化鉄)を塗った横穴式石室が確認され、「前方後円墳、横穴式石室、埴輪」と前方後円墳祭祀が体系的に実現しているとする見解がある。(韓国調査報告)
7. ^abcd NHK「日本と朝鮮半島2000年」第2回 "任那日本府"の謎
8. ^ 朝鮮学会編「前方後円墳と古代日朝関係」
9. ^ 山尾幸久は全羅南道までも対高句麗戦に動員しようとする、百済が国家を形づくるプロセスにおける独特な事柄だと述べている。5世紀の第四半期と6世紀第一四半期とに、多くの倭国の有力者が移住して百済に臣従し、当時、百済が全羅道の重要な拠点の領有を進めていたという事実から、山尾は、この地に派遣された武臣の一部に、百済の臣下たる倭国の有力者一世がいたと推測している。そして、山尾は前方後円墳の被葬者について、派遣された倭人系官僚の中には現地で埋葬された者もいたのではないかと述べている(→山尾、2001)。
10. ^ 西谷正もまた、被葬者を倭人系百済官僚だとしている(→西谷、2001)。
11. ^ 一方、森公章は、墓制において規模が権威と密接に関わっていることをふまえ、武寧王陵(20m)を優に越える規模を持った前方後円墳群の存在を、該当地域に百済の影響がおよんでいなかったことの傍証と指摘し、現地化しつつある倭人有力者あるいは倭国の影響下に入った在地首長であろうとしている(→NHK、ETV特集シリーズ「日本と朝鮮半島2000年」第2回"任那日本府"の謎)。
12. ^ 同様に柳沢一男は、百済の侵入に対して、全羅南道の在地首長のなかには倭勢力と互いに密接につながりを持つ層も出現したことを予想し、そのような政治的な結びつきを表すために、前方後円墳や、九州系石室が採用されたと考えられるとした(→柳沢、2001)。
13. ^ 田中俊明は、造墓をおし進めたのは、活発に倭と往来し、在倭の勢力とも交流、政治的な関係をもったこの地域の特定の首長層だと述べ、倭固有の墳形を選択した意図を対外的な政治的アピールを注入したものと理解すべきだとした。また、田中は、全南地域の特定首長層の政策を、百済と完全に敵対するのではなく、倭と百済と等距離な関係を保とうとするものとし、前方後円墳の採用について百済の進出が、外見的に倭寄りの方向を選ばせたと述べている(→田中、2001)。
14. ^ 朴天秀「韓国の前方後円墳は倭人の墳墓」
15. ^『朝日新聞』2010年3月19日

播磨の遺跡巡りの見どころ
ー卑弥呼の時代　弥生墳丘墓から古墳へー

（高川　博）

播磨の弥生墓制には、前期から土器棺墓・配石墓・土壙墓・石棺墓・墳丘墓などと呼称される例があり、各々が組み合わさって存在する。特に**周溝墓**は円形と方形は混在することが早くから知られ、墳丘墓概念が提唱されるとその呼称も広まった。

さらに古墳成立への胎動について、当地域は吉備地方との関わりを示す竪穴式石槨や墳丘墓、讃岐・阿波地方との関わりを示す土器の流入や竪穴式石槨と積石の墳丘など、より詳しい実態も判明してきた。

有年原・田中、北山などの**円形墓の展開**を追うと弥生前期の讃岐と備前に求められる。後期になると播磨はもちろん、但馬西部と伊予にまで拡大し、東部瀬戸内を中心として徐々にその分布域が拡がりを見せている。終末期～庄内期には和泉・河内・大和・近江にまで分布域が拡大し、円形墓が東部瀬戸内から端を発して大型化を遂げながら畿内へ進出したことは明らかである。この円形墓の延長線上に**前方後円墳**を推定することは容易である。

ただし播磨のみならず円形墓の分布域でも方形墓が広く併存していることは踏まえておく必要がある。

初期古墳の埋葬施設は長大な**竪穴式石槨**が一般的であるが、その直前頃には養久山３２・４０号、岩見北山積石塚１号などではやや小型の竪穴式石槨または類似施設を造る例が知られている。これらの石槨は、備後以東の瀬戸内沿岸と四国北東部に分布が認められ、こうした地域で創出され、発展した埋葬施設であることは明らかである。

また播磨の弥生墳丘墓には内行花文鏡や画文帯神獣鏡などの**鏡を副葬**する例が現れる。

この時期の鏡については、舶載鏡と北部九州で作られた彷製鏡の二者がもたらされており、いずれにしても瀬戸内海交通を介して播磨の首長たちが中国や北部九州からの文物を入手する機会を持っていたものと推察される。

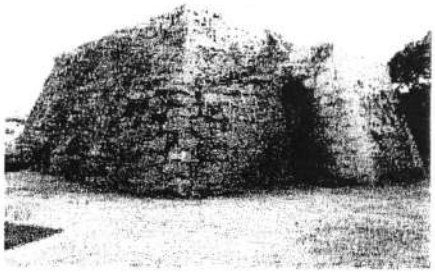
播磨の弥生終末期から初期古墳への動態をみると、**庄内式併行期の画期**は大きなものがある。権現山 51 号墳の吉備系壺形土器と特殊壺・特殊器台形埴輪と三角縁神獣鏡の共存、丁瓢塚の特殊な壺形土器は重視しなければならない。この時期、大和においては箸墓や西殿塚などの初期古墳が築造されていたのである。

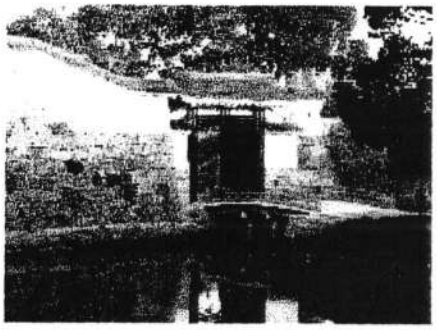
古墳以前の考古資料から播磨の地域的特徴をあえて指摘するなら、備讃瀬戸、山陰地域との交流、庄内式甕の生産、円形墓の分布、竪穴式石槨の採用、各種青銅鏡の入手と副葬などである。こうした傾向は古墳成立後も大半が解消されることなく継続したと考えられる。初期古墳の諸要素にもそれらは根強く残るからである。播磨において弥生時代と古墳時代の境界を決定付ける新しい墓制上の要素とは、やはり**前方後円墳（方墳）の成立**である。短かった墳丘の突出部は長大な前方部に転化し、小さかった竪穴式石槨は長さが４ｍ以上になって石蓋を採用する。副葬品は大量副葬に変化し、とりわけ複数の鉄製武器や農工具に加えて三角縁神獣鏡が入手されている。

【赤穂城跡】

所在地：　兵庫県赤穂市加里屋
遺　構：　天守台、復元櫓、復元門、曲輪、石垣、堀
形　式：　平城　　築城者：　浅野長直　　築城年代：慶安元年

見どころ





赤穂城には、五層天守が建てられる予定であったとか。 このため本の丸に残る天守台は、53，000石の外様小藩にしては規模の大きいものだ。 天守台に登ると本の丸・二の丸・三の丸と城の中核部が一望に見渡せ、この城の規模に改めて驚かされる。

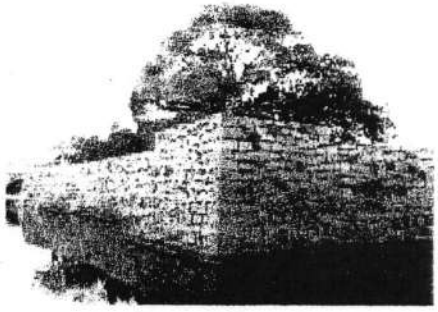
本の丸には、櫓門の本の丸門、厩口門が復元され、また本の丸御殿が平面的に復元され、当時の御殿の間取りが良くわかる。

赤穂城の縄張りは、輪郭式縄張りで本の丸と二の丸を同心円状に置き、北に三の丸を配置している。 曲輪の配置よりも赤穂城は、山鹿流の甲州流軍学による縄張りとして有名で、折れや斜（ひずみ）を塁線に多用した複雑な縄張りだ。

赤穂城は、本の丸以外に二の丸・三の丸一帯が発掘調査が行われていて、随時復元・整備が行われるとのこと。

三の丸の、大手門・隅櫓が復元されているが、大手桝形は、左曲がりだが、本来は右曲がりで櫓門が存在していた。 ここも現在復元工事中で、右曲がりに石垣が組み直され、大手櫓門も復元される。 完成が待ち遠しい。

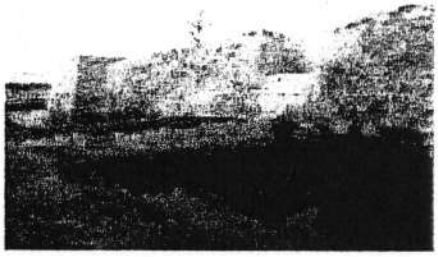
歴　　史



赤穂城は、慶長5年に関ヶ原の戦功により播磨姫路城主となった池田輝政の所領となり、重臣垂水勝重が現在の本の丸・二の丸のところに陣屋造りの「掻き上げの城」を築いた。

赤穂城は、池田輝政の五男池田政綱が35，000石を領して城主となった。 寛永8年、政綱が嗣子無く没し、政綱の弟輝興が佐用利神城から赤穂城主となった。

正保2年に池田輝興改易後、常陸笠間から浅野長直が入封し、慶安元年に幕命により、池田氏の陣屋を城に改築した。



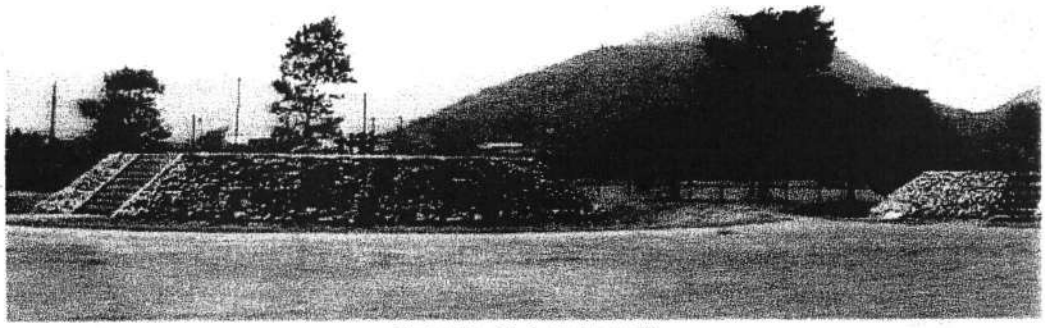
浅野長直・長友・長矩と続き、元禄14年に浅野長矩は、江戸城松の廊下で高家の吉良義央に刃傷に及び、即日切腹。播州浅野家は断絶となった。 元禄15年12月、大石内蔵助えお始めとして47名が、吉良邸に討ち入る。 いわゆる「忠臣蔵」の物語。

浅野氏断絶の後、永井直敬、続いて宝永3年に備中西江原より森長直が2万石で入城する。 森氏は、12代に渡って居城し、森忠義の時に明治を迎える。

赤穂城跡公園案内図

Guide Map of Ako Castle Park

うねはら・たなかいせき
有年原・田中遺跡公園　（所在：赤穂市有年原1090番地）



有年原・田中遺跡公園

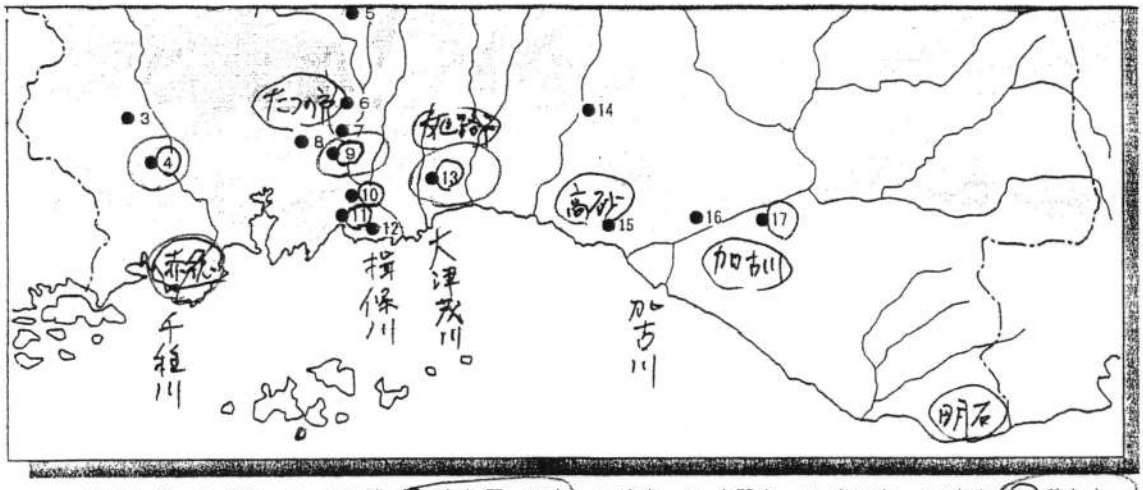
有年原・田中遺跡（うねはらたなか）　（赤穂市）

千種川の左岸に位置する弥生時代から中世に至る複合遺跡。発掘調査によって弥生時代中期後半になって、この場所に本格的な集落が展開されたことが、竪穴住居跡などから確認された。弥生後期には、大型の円形墳丘墓２基や木槨墓群、祭祀土坑などが築かれた。

１号墓は直径が１９ｍ。東側に陸橋部が、西側に突出部が築かれていた。周溝の幅は５ｍ、検出された溝の深さは１ｍだった。周溝墓から特異な装飾を持つ特殊器台、特殊壺、装飾高坏の破片などが出土し、また多量の川原石も出土した。墳丘部は完全に削り取られていたものを復元整備されたものである。

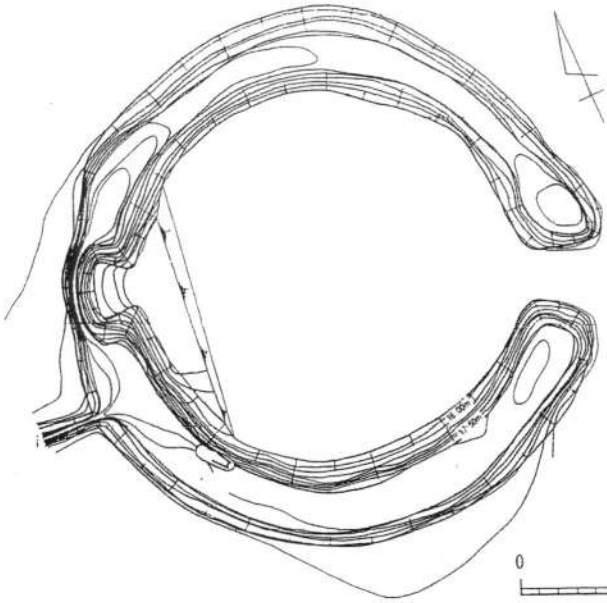
２号墓の直径は１５ｍ、周溝の幅は２ｍ。溝から川原石や特殊器台、特殊壺が出土した。埴輪の起源は弥生後期の吉備地方の首長墓に見られる特殊器台、特殊壺にあるとされているが、ここから出土した物の形状や文様は吉備とは違う独自性が見出される。

古墳前期の遺構や遺物は確認されていないが、中期には再び集落が築かれ、５世紀の後半から６世紀にかけて多数の竪穴住居が営まれていることから大集落があったことが分かった。

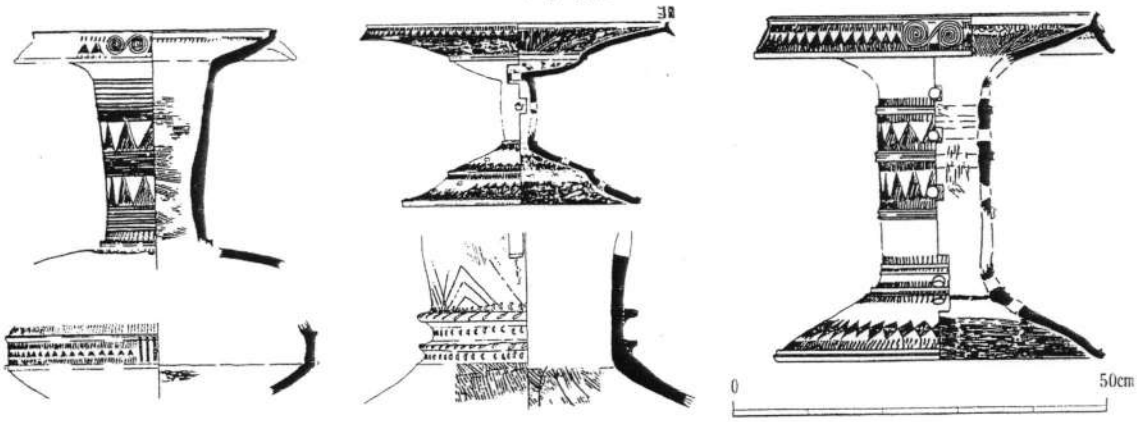


1. 西ノ土居　2. 吉福　3. 井の端　4. 有年原・田中　5. 吉島　6. 白鷺山　7. 半田山　8. 南山　9. 養久山　10. 権現山　11. 岩見北山　12. 綾部山　13. 丁瓢塚、山戸　14. 横山　15. 経塚山　16. 神吉山　17. 西条

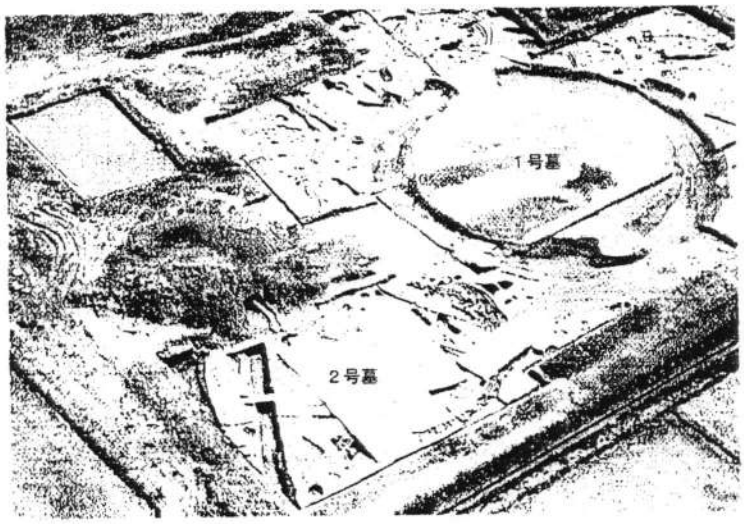
挿図５　播磨地域の主要な弥生墳丘墓・古墳の分布



1号 墳丘



1号周溝内出土土器



1号・2号 状況写真

図7 有年原・田中1・2号（赤穂市）

【養久山古墳墓群】（たつの市）

旧揖保川町と旧龍野市との境にあり、揖保川下流右岸に位置する養久山尾根筋に分布する古墳墓群。前方後円墳２、双方中方墳１を含む38基からなる。

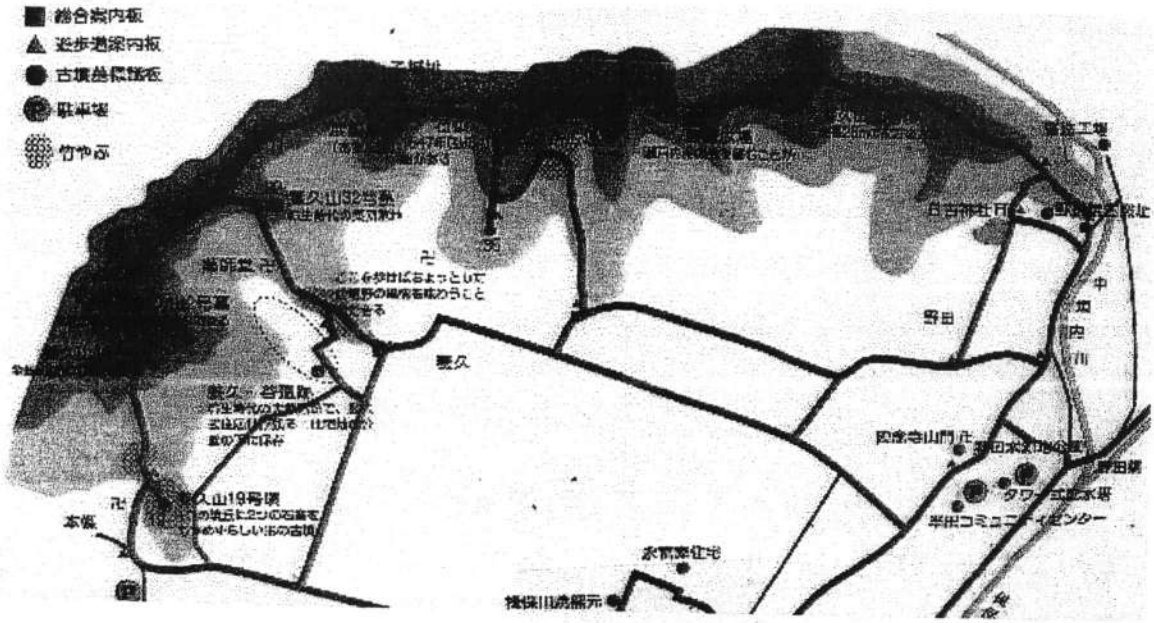
１号墳は前方部が細長くバチ形に開いた前期の全長３０ｍの前方後円墳で墳丘裾に列石が巡る。主体部は竪穴式石室１、箱式石棺５からなり、集団墓の様相を呈する。
後円部では縦長の石材を基底石として斜面に立てかける葺き石構造が確認される。

２号墓は弥生後期の径９ｍの墳丘墓で２基の箱式石棺が露出する。

５号墓は弥生後期の中方双方形墳墓で、中心から壺棺が見つかった。

１８号墳は古墳前期の全長３０ｍの前方後円墳で、壺棺が検出された。

２０号墓は弥生後期の径１５ｍの墳丘墓で箱式石棺の一部が露出する。

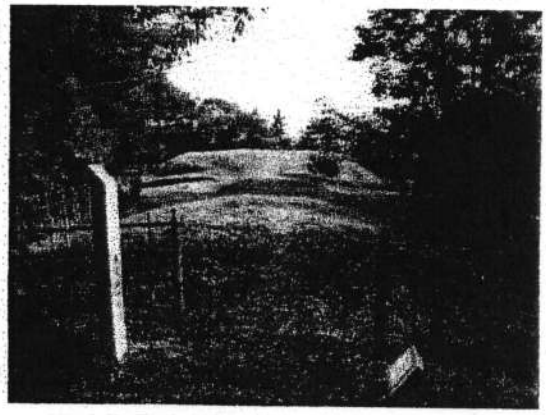


分布図

養久山1号墳

立て札は古墳時代前期（3世紀）の全長32mの前方後円墳。1967年（昭和42）の発掘調査により、前方部の墳形などから、最古形式の前方後円墳として注目されたという。

朝日新聞記事は、養久山1号墳の「外見」は古墳だが、「中身」は弥生時代の墳墓の特徴がある。後円部の中央に墓の主人の石室があり、その周辺を5つの石棺が取り巻く。弥生時代は、複数の遺体を1つの墓に埋葬するケースがよくみられるという。過渡期というのは、弥生時代から古墳時代への過渡期ということだったのだ。



前方後円墳といえば、鍵穴のような形がよく知られているが、1号墳は前方部と後円部の間のくびれが曲線で「ばち形」をしている。この形の古墳は播磨と東四国に多く、卑弥呼の墓説のある奈良県桜井市の箸墓古墳（3世紀中ごろ～後半、全長280m）とも似ている。

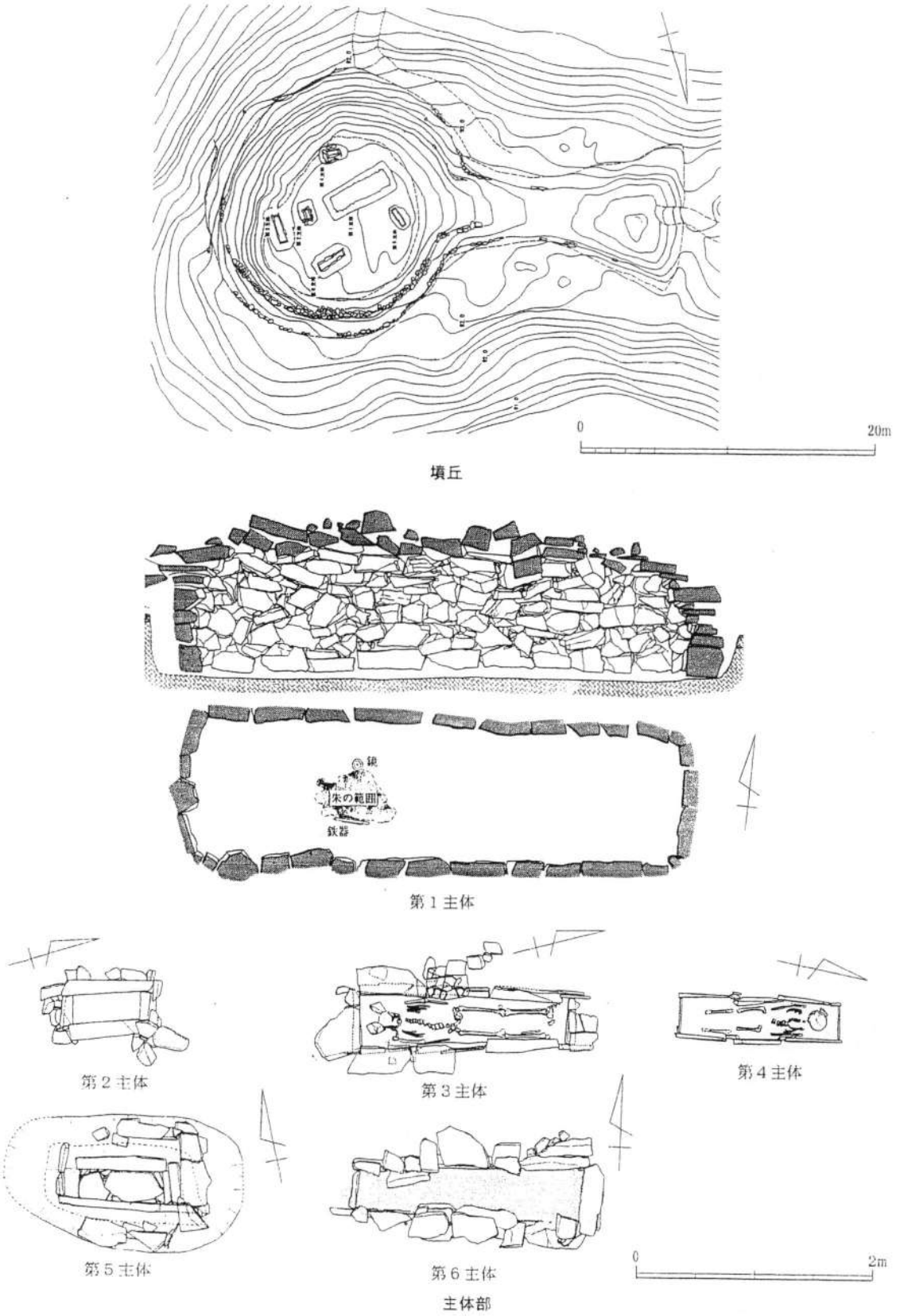
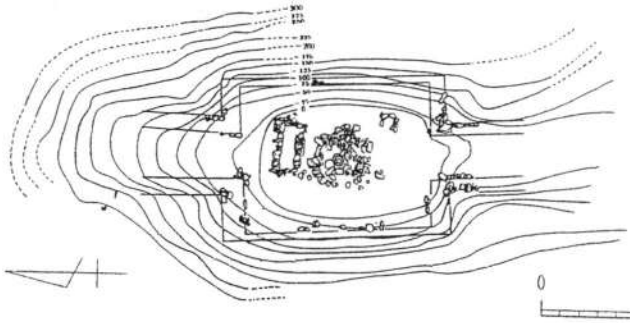
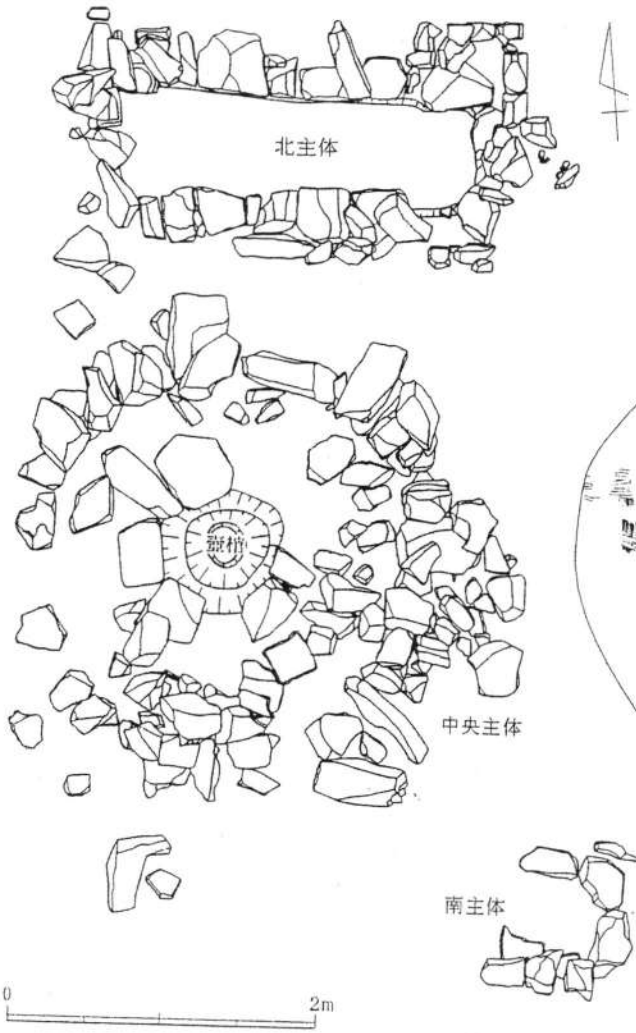


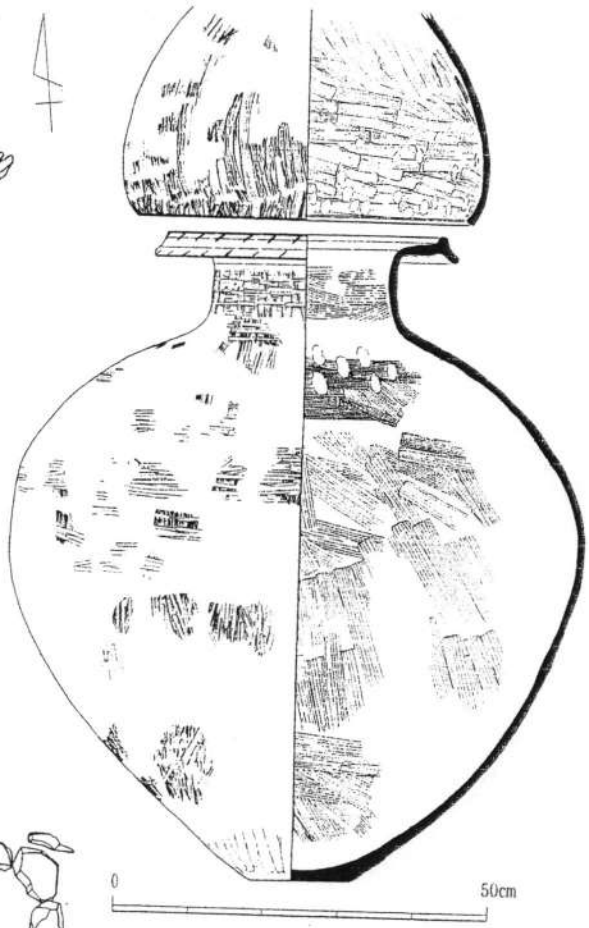
図21　養久山１号（たつの市揖保川町）



墳丘



主体部



中央主体壷棺

図11　養久山５号（たつの市揖保川町・揖西町）

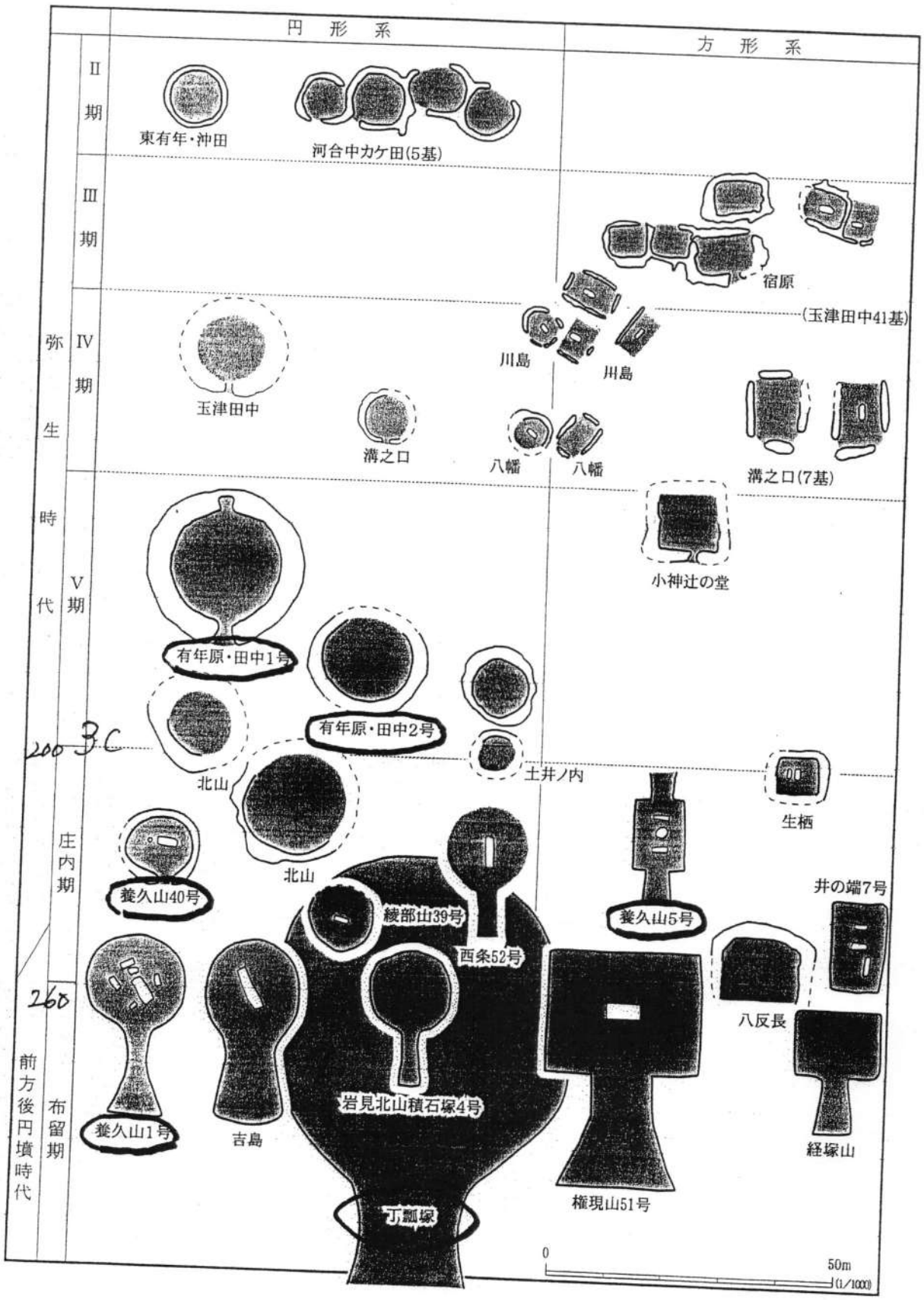
【丁瓢塚（よろひさごづか）】（姫路市）

大津茂川流域の平地に築かれた墳長１０４ｍの前期前半の前方後円墳。緩い弧状を呈して開く細長い前方部を持ち、養久山１号墳（丁瓢塚の３分の１）と同一規格で築造。規格の類例は讃岐にも幾つか見られる。

また半裁または円形の竹管文がスタンプされた伯耆系の壺形と見られる特殊土器が採集されており、葬送祭祀における伯耆との関係が窺われる。

丁瓢塚の東方の丘陵上には５群９０基からなる横穴式石室を内部主体とする古墳群がある。宅地造成に伴い調査が行われ、古墳群の一部は古墳公園として整備された。

<丁瓢塚古墳群>



挿図6　播磨各地の主要墓制の変遷

【斑鳩寺（いかるがでら）】

１４００有余年前の推古天皇の時代、聖徳太子が勝鬘経、法華経などを天皇に講じられ、これに御感あった天皇より播磨国の水田を賜り、太子はこれを仏法興隆のため法隆寺に寄進されました。

※『日本書紀』によると、寄進の時期は推古１４年（６０６年）７月、水田の規模は１００町、『聖徳太子伝記』では同じく、太子４４歳御時、３６０町とある。諸文献に諸表記がある。後の平安時代に、この地は法隆寺の荘園「法隆寺領播磨国鵤荘（いかるがのしょう）」へと発展し、その中心に荘園経営の中核的存在として、政所とともに斑鳩寺が建立されました。

この創建以後、鵤の地はながく、この地方の太子信仰の中心としても栄え、播磨の国の中における特異な文化興隆地域を形成することになりました。

斑鳩寺は、往古には七堂伽藍、数十の坊庵が甍を並べ壮麗を極めましたが、出雲の尼子氏の侵攻で播磨が混乱していた天文１０年（１５４１年）４月７日、不慮の火災により、諸堂が灰燼に帰しました。その後、楽々山（ささやま）円勝寺の円光院昌仙らによって龍野城主赤松下野守政秀らの寄進を得て、講堂、三重塔、太子御堂（聖徳殿）、仁王門などの伽藍が復興され、現在に至っています。

斑鳩寺は創建以来、法隆寺の別院でしたが、江戸時代以降は天台宗となり、今なお、「お太子さん」として近郷近在から広く信仰を集めています。

また、木造聖徳太子立像をはじめ、木造日光・月光菩薩立像など多くの重要文化財が残されています。

斑鳩寺 仁王像

斑鳩寺 仁王像

斑鳩寺 講堂

斑鳩寺 三重塔

斑鳩寺 鐘楼と三重塔

斑鳩寺 鐘楼

斑鳩寺 聖徳殿(太子堂・太子殿)

生石神社

出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

生石神社(おうしこじんじゃ)は、兵庫県高砂市にある神社である。石の宝殿と呼ばれる巨大な石造物を神体としており、宮城県鹽竈神社の塩竈、宮崎県霧島神宮の天逆鉾とともに「日本三奇」の一つとされている。

石の宝殿は、横6.4m、高さ5.7m、奥行7.2mの巨大な石造物で、水面に浮かんでいるように見えることから「浮石」とも呼ばれる。誰が何の目的でどのように作ったかはわかっていない。

山形県にも同名の「生石神社」があり、当社の分社と伝えられている。

「生石」の読みは本来「おうしこ」であるが、「おおしこ」・「おいしこ」と誤表記・誤読されている場合もある。

生石神社

生石神社　本殿

所在地	兵庫県高砂市阿弥陀町生石171
位置	北緯34度46分57.15秒 東経134度47分42.78秒
主祭神	大穴牟遅命 少毘古那命
社格等	県社
創建	伝 崇神天皇治世
例祭	4月第2日曜日

目次

- 1 祭神
- 2 歴史
- 3 境内の風景
- 4 交通アクセス
- 5 外部リンク

祭神

大穴牟遅命、少毘古那命を主祭神とし、大国主大神、生石子大神、粟嶋大神、高御位大神を配祀する。

歴史

社伝では、崇神天皇の時代、国内に疫病が流行していたとき、石の宝殿に鎮まる二神が崇神天皇の夢に表れ、「吾らを祀れば天下は泰平になる」と告げたことから、現在地に生石神社が創建されたとしている。

石の宝殿について『播磨国風土記』の大国里の条には「原の南に作り石がある。家のような形をし、長さ二丈、広さ一丈五尺、高さも同様で、名前を大石と言う。伝承では、聖徳太子の時代に物部守屋が作った石とされている。」という意味の記述がある。聖徳太子が摂政であった時代には物部守屋はすでに死亡しており、矛盾をはらむ記述ではあるが、8世紀初期には6～7世紀頃に人の手で造られたと考えられていたことになる。風土記が一般に流布されたのは江戸時代後期からであり、それまでの石の宝殿に関する文献で風土記の内容を継承したものは見られない。『万葉集』巻三、生石村主真人の歌にある志都乃石室は石の宝殿のことであるとも言われるが定かではない。

石の宝殿は8世紀以前からあったことになるが、生石神社は『延喜式神名帳』や国史に掲載されておらず、『播磨国内神名帳』の「生石大神」が文献上の初見であるとされる。『峯相記』では生石神社・高御位神社の解説で「天人が石で社を作ろうとしたが、夜明けまでに押し起こすことができずに帰っていった」という内容が記されており、この時期には石の宝殿は人の手によるものではないとする伝承が生まれている。

『播州石宝殿略縁起』では「神代の昔、大穴牟遅と少毘古那が国土経営のため出雲からこの地に至り、石の宮殿を造営しようとして一夜のうちに二丈六尺の石の宝殿を作ったが、当地の阿賀の神の反乱を受け、それを鎮圧する間に夜が明けてしまい、宮殿は横倒しのまま起こすことができなかった。二神は、宮殿が未完成でもここに鎮まり国土を守ることを誓った」となり、『峯相記』より具体的な神格が与えられている。

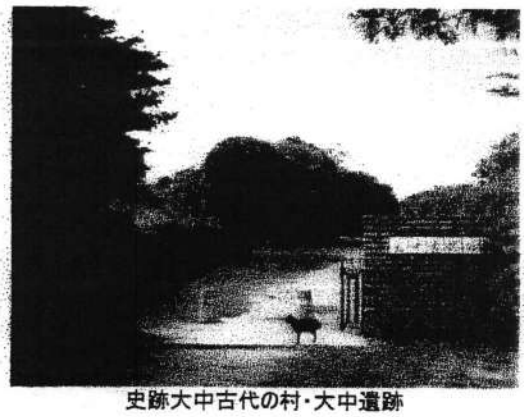
成務天皇11年、羽後国飽海郡平田村生石(現 山形県酒田市大字生石)に当社の分社が作られた。

1579年(天正7年)、羽柴秀吉が三木合戦の折、神吉城攻略のために当神社を陣所として貸与するよう申し出たが、拒否されたために焼き討ちに逢わせた。(当時の宮司は神吉城主の弟であった。)
焼け残った梵鐘は持ち去られ、関ヶ原合戦の時に西軍石田三成方の勇将大谷吉継が陣鐘として使用した。敗戦の結果、徳川家康が戦利品として美濃国赤坂の安楽寺(大垣市)に寄進している。鐘の表面には、応永26年乙亥(1419年)「播州印南郡平津庄生石権現撞鐘」と刻まれている。

兵庫県立考古博物館

2007.10.28(日) 兵庫県播磨町

大中遺跡



史跡大中古代の村・大中遺跡

大中遺跡　竪穴式住居

播磨地方の中心を流れる加古川周辺の播磨平野では、太古の昔から文化をはぐくみ栄えさせ、旧石器文化を始め多くの遺跡を残しています。

大中遺跡は、昭和37年6月に考古学同好グループの播磨中学校生徒3人によって発見されました。当時、この台地での耕作時には、土器片等が多数出土していたといわれています。

大仲遺跡・播磨郷土史館では、旧石器時代から、縄文時代、弥生時代に栄えた集落跡と竪穴式住居を復元し、出土品とともに播磨地方の歴史と文化を紹介しています。

大中遺跡は海抜13mの洪積世台地の南端にあって、加古川の氾濫源の東端に位置してます。
弥生時代中期から古墳時代中期にかけての代表的な遺跡で、約44000m2の範囲に多くの住居跡が残されています。そして、ここからさまざまな用途や機能に応じた土器や鉄器・砥石などとともに、中国と交流のあったことを証明してくれる分割鏡が出土しています。

これらの出土品や住居跡は稲作農業がようやく根づいて生活が安定し、階級の文化がはじまり、古代国家が形づくられようとする時代の社会や暮らしのようすを知る上で非常に重要なものです。

明石原人　（今回の旅行では見学しません。）

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

明石原人（あかし-げんじん。**明石人**〈あかし-じん〉とも称）は、かつて日本で発見された化石人骨を基に、日本列島に居住したと推測された古人類。

日本考古学史および人類学史において注目されるべきものであったが、現物は戦禍によって失われており、疑問の根本的解明は望めない。

呼称

明石原人は従来の呼称であるが、これは、1960年代ごろまで日本では国内で発見された化石人骨を推定年代に関係なく「原人」と呼ぶ習慣があったためである。北京原人やジャワ原人などとは異なり、明石原人は、実際には「原人」ではない。旧人説もあるが猿人・原人・旧人・新人のうちどの進化段階に該当するかは現時点では定かではない。ゆえに今日ではより正確を期して「原人」をただ「人」とする場合も多くなっている。

2つの呼称が並立するなか、発見時からの経緯に重点を置く観点により、現状を正確に反映してはいないものの当時から使われ続けている呼称である「明石原人」のほうを、本項目名に採用した。

発見と喪失、研究の経緯

昭和6年（1931年）4月18日、兵庫県明石市の西八木海岸[1]において民間人・直良信夫が、古い人骨の一部（右寛骨〈う-かん-こつ〉: os coxae (right)）を発見した。しかし、直良が無学歴のアマチュア考古学者[2]であったこともあり、専門家には相手にされないままであった。鑑定のため東京帝国大学（現・東京大学）の松村瞭のもとへ送られ、石膏模型を製作するなど、予備的な研究はなされたのであるが、最終的な結論が出されないまま返却され、人骨を旧石器時代のものとする直良信夫の主張は、学界では認められることは無かった。そして、第二次世界大戦中の昭和20年（1945年）5月25日、東京大空襲によって化石現物が焼失してしまう。

戦後、松村瞭が製作していた石膏模型を基に東京帝国大学理学部人類学科教授・長谷部言人が研究を再開し、昭和23年（1948年）、発見された人骨は原人のものであるとして、新種の原人 *Niponanthropus akashiensis*（ニポナントロプス・アカシエンシス、日本語名：**明石原人**」であると主張した。しかし化石はすでに無く、疑問を呈する研究者も多かった。

時は下って34年後の昭和57年（1982年）、コンピューターによる石膏模型の解析が、東京大学の遠藤萬里と国立科学博物館の馬場悠男によって行われる。その結果、人類進化史の各段階の人骨と比較して「**明石原人**」は現代的であるとして、原人ではなく、縄文時代以降の新人であるという説を打ち出した。また、昭和60年（1985年）には国立歴史民俗博物館の春成秀爾が西八木海岸で発掘調査を行い、人骨が出土したとされる地層と同じ更新世中期の礫層から人工的加工痕の認められる木片を発見。しかし、直良が発見した人骨がどの段階のものであったのかは、今もって解明されていない。

脚注

1. ^ 現・明石市大久保町八木、西八木遺跡。JR神戸線大久保駅近隣。
2. ^ のち、早稲田大学教授となってはいる。

五色塚古墳

五色塚古墳（ごしきづかこふん）は、兵庫県神戸市垂水区にある、兵庫県下最大の前方後円墳。別名「千壺（せんつぼ）古墳」。築造年代は4世紀末から5世紀初頭と推定されている。国の史跡に指定されている。

五色塚古墳

五色塚古墳（1985年）
国土交通省 国土画像情報（カラー空中写真）を元に作成。

位置	北緯34度37分47.47秒 東経135度2分45.18秒
所在地	兵庫県神戸市垂水区五色山4丁目
形状	前方後円墳
規模	全長194m、高さ18m
築造年代	4世紀末～5世紀初頭
被葬者	地方豪族か?
出土品	円筒埴輪
史跡指定	大正10年（1921年）国指定

目次

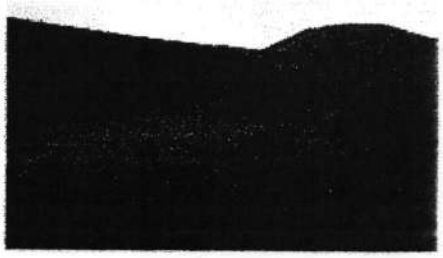
- 1 概要
- 2 復元整備
- 3 所在地
- 4 見学
- 5 交通アクセス
- 6 周辺情報
- 7 イベント
- 8 関連項目
- 9 外部リンク

概要

墳丘は前方部を南西に向けた三段構築の前方後円墳で、全長194メートル、高さは前方部で11.5メートル、後円部で18メートルである。墳丘は葺石で覆われている。

「五色塚古墳」の呼称は、明石海峡を挟んで対岸の淡路島西南部の五色浜付近から石を運んで葺かれたことに由来するという説もあったが、時間帯で変わる太陽の光によって葺かれた石が異なる色で反射することに由来するという説も出てきている。古墳の表面に使われている石は明石海峡内のものとされている。

『日本書紀』神功摂政元年春二月の条に「播磨に詣りて山陵を赤石（明石）に興つ。仍りて船を編みて淡路嶋にわたして、其の嶋の石を運びて造る」という記事があり、これが、五色塚古墳に関する伝承と云われている。瀬戸内海の海上交通の重要地点である明石海峡を望む高台に造られていることから、神戸の西部から隣の明石にかけて相当大きな力を持っていた豪族の墓と考えられている。



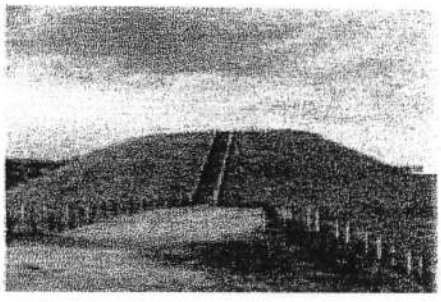
前方部

堀（当時より空堀であったと考えられている）のなかには前方部と後円部が接するあたりの東側に1辺20メートル、高さ5メートルの方形、および後円部の東側にも高さ1.5メートルのマウンドがある。当時は石が葺かれていた。

また、すぐ隣には、直径60メートルの円形の「小壺（こつぼ）古墳」（国の史跡）があり、五色塚古墳より少し古い時代に造られたと考えられている（こちらは葺石はされていない）。

復元整備

1965年（昭和40年）から1975年（昭和50年）の整備事業により、造られた当時の様子に復元されている。表面にはコブシくらいの大きさの石（葺石、ふきいし）が約223万個敷き詰められているが、前方部のものは発掘された葺石を利用し、後円部のものは新たに入れたものである。当初2,200個ほど並べられていたと思われる高さ1メートルほどの筒型の円筒埴輪が、後円部の最上段のみにレプリカを置いて再現されている。

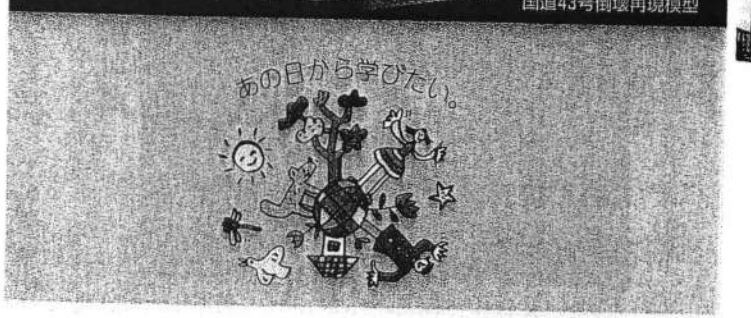


国指定 天然記念物 野島断層

北淡震災記念公園

フェニックスパーク

国道43号倒壊再現模型



野島断層からのメッセージ

地震で現れた野島断層を、ありのままに保存・展示し、いろいろな角度から断層をわかりやすく解説。また阪神・淡路大震災を語り継ぐだけではなく、将来起こりうる大地震について考えさせてくれます。大人から子供まで、みんなに真剣に伝えたいこと、いっぱいです。

メモリアルハウス

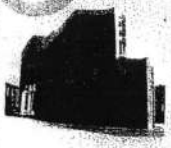
地震断層が横切る民家を、メモリアルハウスとして保存。敷地内を走る断層や震災当時の建物のようすが公開されています。また、再現された「地震直後の台所」も展示されています。

震災の語り部

震災を風化させないため、自らの体験を未来に生かせるように語ります。
●毎週火曜日10時～12時・14時～16時に活動しています。
●団体の場合はセミナーハウスで話が聞けます。（要予約・要費用）

活断層ラボ

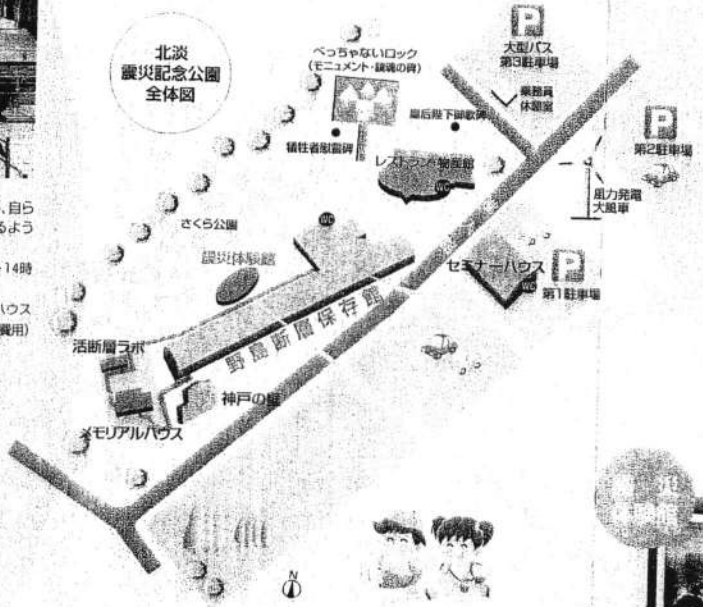
地震の仕組みや世界の活断層、液状化実験や津波のシミュレーション映像などいろいろな角度から。地震について学べる施設です。



神戸の壁

第二次世界大戦の神戸大空襲に耐え、阪神・淡路大震災では、地震と火災に耐えた神戸市長田区若松市場の防火壁です。野島断層と共に震災を語り継いでいきます。

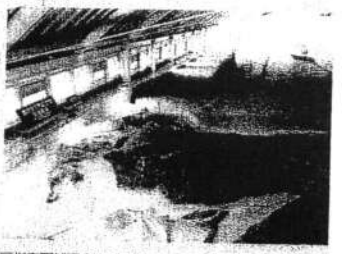
北淡震災記念公園全体図



兵庫県南部地震と野島断層

平成7年1月17日午前5時46分に発生した兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）は、M7.3、最大震度7を記録し、死者6,434人という戦後最大の被害をもたらしました。淡路島北淡町（現淡路市）でも、長さ約10kmの地震断層が出現。なかでも小倉地区は断層による道路、生垣、畑の畦などの破壊状況が各所に見られ、いまなお地震エネルギーの巨大さと、断層運動による複雑な地表面の変形に見られる自然の脅威を如実に語りかけてきます。〈平成10年7月31日に、国の天然記念物に指定されました。〉

断層保存ゾーン



国指定天然記念物野島断層を、そのまま屋内保存。地形の変化の様子を、カメラや解説でわかりやすく見学できます。

震災体験館

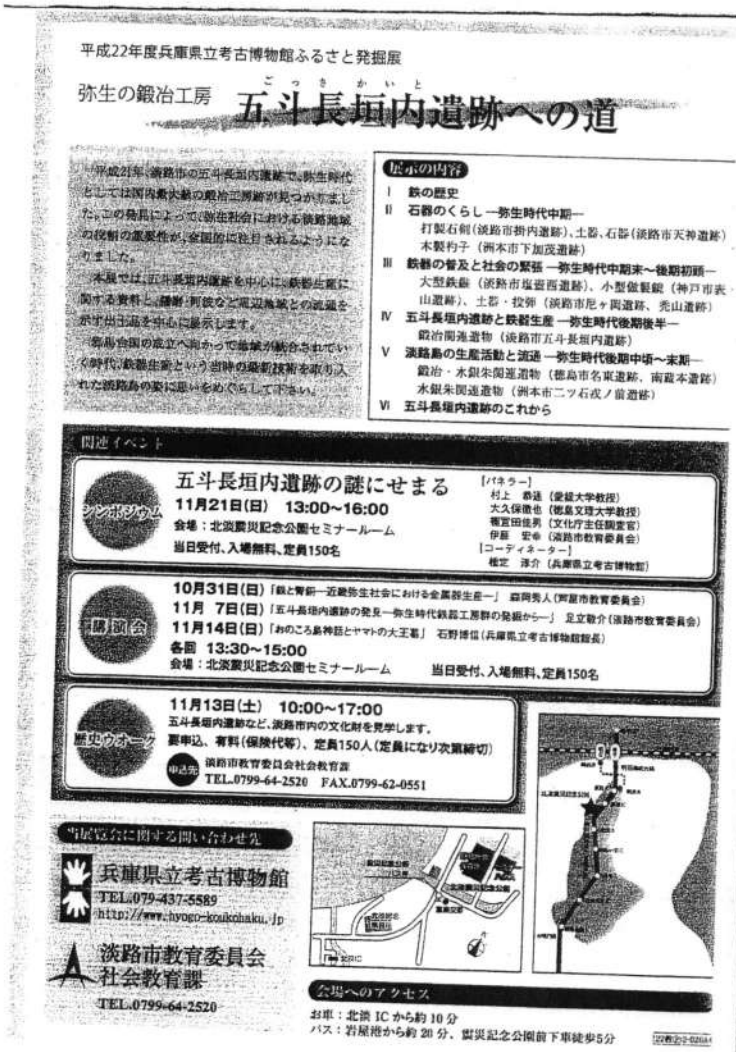
兵庫県南部地震の震度7を体験できます。（定員9名）映像シアターでは、震災の記録映像をごらんいただけます。

【五斗長垣内遺跡（ごっさかいと）】淡路市

淡路市黒谷五斗長地区にあり、平成 13 年からの調査で発見された。その結果弥生時代後期（1 世紀半ば～3 世紀初め）の建物跡が２３棟見つかった。　うち１１棟の竪穴建物では、床面で強い熱を受けて赤く焼けた「炉跡」が認められ、鉄鏃をはじめとする鉄製品、素材となる鉄片、鏨（たがね）で裁断された鉄細片が出土した。

また、石鎚、鉄床石（かなとこいし）、砥石など鉄器づくりに使ったと思われる石製工具も数多く出土しており、これら１１棟の竪穴建物は鉄器生産を行った弥生時代の鍛冶工房と考えられる。

この遺跡は弥生時代後期では国内最大級の鉄器生産集落で、学術的にも当時の鉄器生産や流通を考える上で貴重な遺跡である。



幽宮（表紙写真）

大鳥居から正参道を進むと、二の鳥居（鋼製）の先に神池が広がり、反り石の神橋が架かって檜皮葺の重厚な神門が参詣者を迎へる。

全国には、神宮號を宣下された格式高いお宮が、二十三社あるが、いづれも御皇室にお縁りの深い神社並びに天皇をお祀りするお宮で、當神宮は御皇室の御祖神たる天照御大神の御両親にあたり、日本民族の大祖先神である。

日本書紀に「是以構幽宮於淡路之洲」とある。

御祭神

伊弉諾大神
伊弉冉大神

御社格

延喜式神名帳　名神大社
淡路國一之宮
明治十八年　官幣大社
昭和二十九年　神宮號宣下

摂社　濱神社　淡路市郡家宮の森鎮座
末社　櫛笥神社　淡路市多賀老の内鎮座
境内末社
左右神社・根神社・竈神社・鹿島神社
住吉神社・岩楠神社・淡路祖霊社

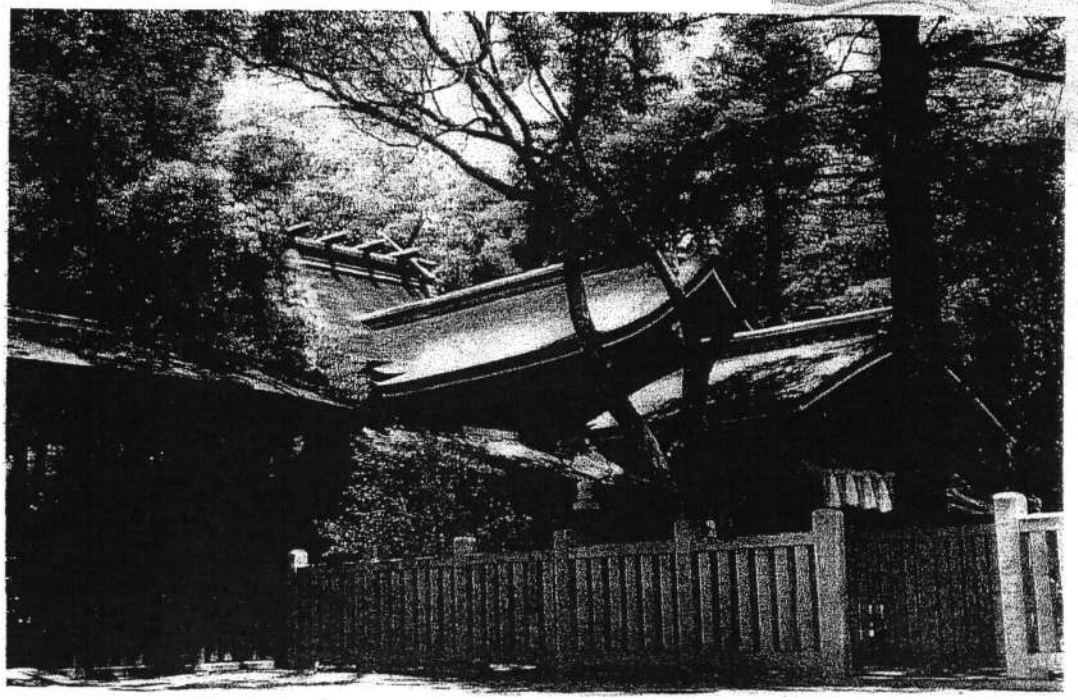
御由緒

古事記・日本書紀には、国生みに始まるすべての神功を果たされた伊弉諾大神が、御子神なる天照大御神に国家統治の大業を委譲され、最初にお生みになられた淡路島の多賀の地に「幽宮」を構へて余生を過ごされたと記される。その御住居跡に御陵が営まれ、至貴の聖地として最古の神社が創始されたのが、當神宮の起源である。地元では「いっくさん」と別称され日少宮・淡路島神・多賀明神・津名明神と崇められてゐる。

本殿の位置は、明治時代に後背の御陵地を整地して移築されたもので、それ以前は、禁足の聖地であった。御陵を中心として神域の周囲に濠が巡らされたと伝へ、正面の神池や背後の湿地はこの周濠の遺構といふ。

建物や工作物は、明治九年から同二十一年に官費で造営されたものが殆んどだが、神輿庫及び東西の御門は、旧幕時代の阿波藩主の寄進による。

境内地は、約一万五千坪。沖積地にあって天然記念物の大楠など照葉樹林に覆はれ、四季を彩る草木が繁茂する日本最古のお社である。江戸時代の地誌によれば、二丁四方の社地を領したとあり、広大な神域であった。



橋に願いを

大鳴門橋（徳島県－兵庫県）

渦潮 眼下に迫る観光拠点

徳島県鳴門市からバスで大鳴門橋を渡り、淡路島を経て明石海峡大橋を走ると、やがて神戸市内に着く。神戸淡路鳴門自動車道で1時間20分ほど。毎日片道130便のバスがこの道で関西と四国をつなぐ。四国－本州間を結ぶ3路線の一つだ。

□

大鳴門橋は鳴門海峡上に造られた自動車専用道。その下に新幹線を通す計画が頓挫し、その一部に観光施設「渦の道」ができた。全長450㍍の鳴門側からの遊歩道で、床のガラス窓から45㍍下の渦潮を見下ろせる。

「同じあほうなら踊らにゃ損ですよ！」。渦の道の展望室で、職員の祖父江偉記（ひでき）さん(58)が景気よく見物客に呼びかける。渦を見られない時間帯に来た人にも楽しんでもらおうと、春と秋の土曜日に阿波踊りを上演している。

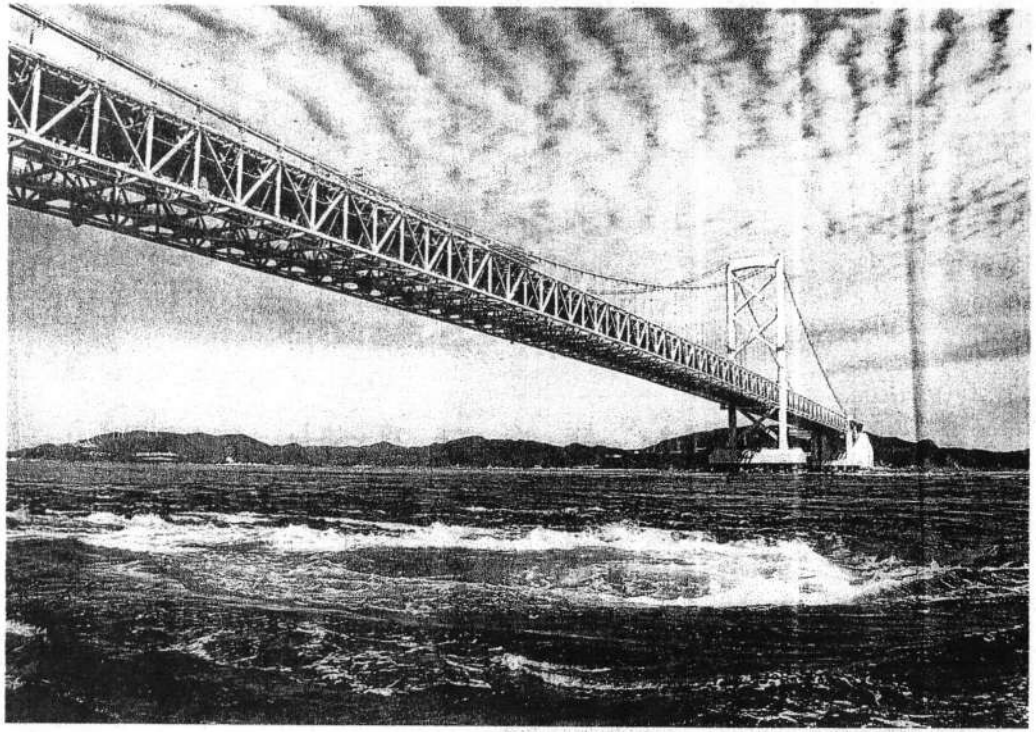
その日は同県板野町の踊り手集団・神栄連が踊りを披露しながら手ほどき。最初はぎこちなかった観光客も、徐々におはやしのリズムに乗っていく。香港から来た女性2人組が優秀賞の渦潮のパネルを受け取った。

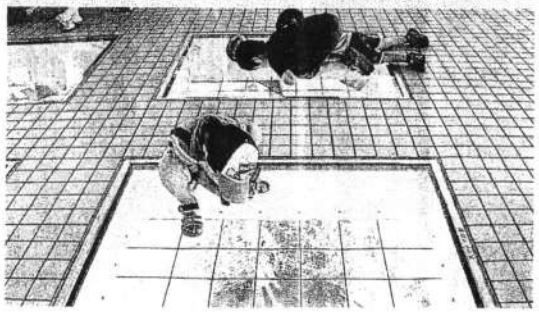
□

司馬遼太郎の「街道をゆく阿波紀行」に「橋がかかると、淡路島とは何でしょう、橋脚じゃないか」と悔しがる人の話が出てくる。鳴門公園で土産物屋を50年以上営んできた女性(90)は「昔はフェリー待ちの人でにぎわったけど、今はさっと橋を渡っていなくなっちゃう」と嘆いた。架橋には賛否が今もある。でも、橋で地域を盛り上げていこうという人たちもいる。

「四季折々の鳴門の景観とかけてハワイととく」。鳴門公園のボランティアガイドを務める新居幸久（にい）さん(72)が観光客に謎かけをする。「その心は、飽き(秋)がこない」。新居さんにとって大鳴門橋は「四国から本州に向けて一番先にできた大切な橋」。公園の先端にある千畳敷からの眺めは、橋の白が海の青さを引き立てる大パノラマだ。

渦の道は、今では徳島有数の観光スポットになった。単なる交通手段から旅の目的へ。新居さんたちが、今日も大鳴門橋を盛り上げている。（根岸華奈子）





㊤観潮船から望む大鳴門橋。渦潮を間近で楽しめる。観潮に適しているのは満潮、干潮の前後2時間ほど。奥は淡路島㊦渦の道展望室のガラス床をのぞき込む子どもたち。ガラスの厚さは26㍉、重量制限は1.2㌧＝いずれも渡辺瑞男撮影

〈メモ〉1985年に完成し、今年開通25周年を迎えた全長1629㍍のつり橋。潮風によるさびからケーブルを守るため、ケーブル内のすき間に空気を送り込み乾燥させている。09年度の1日平均通行台数は2万3337台。関西方面から高速バス「鳴門公園口」下車すぐ、徳島空港からは路線バスで約40分。

■渦の道　徳島県鳴門市の鳴門公園内。㊐9時～㊋5時。☎088・683・6262。500円、中高生400円、小学生250円。近くにある体験型学習施設「大鳴門橋架橋記念館　エディ」との割引セット券あり。

■観潮船　うずしお汽船（☎088・687・0613）、鳴門観光汽船（☎088・687・0101）など。満潮、干潮の時間は事前に「潮見表」で確認を。

■大塚国際美術館　鳴門公園内。古代壁画から現代絵画まで、世界25カ国の西洋名画1000点以上を、陶板に焼き付けオリジナルと同寸で複製した、世界初の「陶板名画美術館」。イタリアのシスティーナ礼拝堂などを空間ごと再現した「環境展示」が見どころ。㊐9時半～㊋5時。鳴門駅からバス。☎088・687・3737。3150円、大学生2100円、小中高生520円。㊊（㊍の場合は翌日）休み。